埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第265集

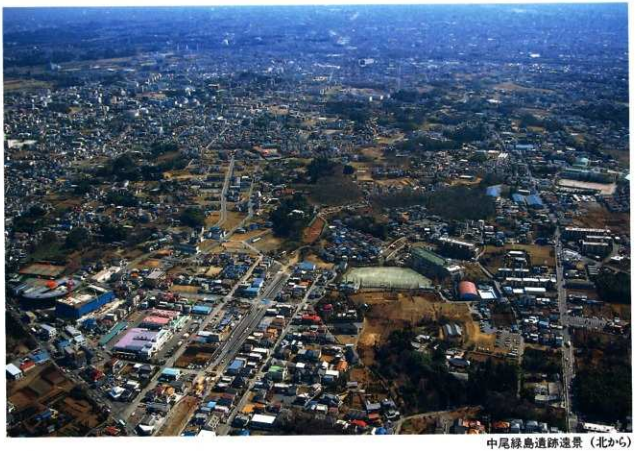
浦和市

中尾緑島遺跡

都市計画道路大宮東京線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

埼　玉　県
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団



中尾緑島遺跡遠景（北から）

中尾緑島遺跡全景（西から）

縄文時代前期の土器（第２号住居跡）

三角形石製品（第２号住居跡）

序

埼玉県では豊かな彩の国づくりを目指し、県民が地域社会の中で、ゆとりと安らぎのある生活ができる基盤づくりを進めています。

人口の増加が続くなか、県民の生活を支えるための道路網の整備も、その一環として進められています。都市計画道路大宮東京線の建設も、県民の快適な生活や地域間の連携を深めるための施策の一つとして計画されたものです。

都市計画道路大宮東京線用地内には、中尾緑島遺跡の所在が確認され、その取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ね、記録保存の措置が講じられることになりました。そのための発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県の委託を受けて、実施しました。

今回調査した中尾緑島遺跡は浦和市の東部、芝川をのぞむ台地上に位置し、周辺には原始から中・近世にかけての遺跡が数多く分布しています。

縄文時代の遺跡に限って見ても、調理場と考えられる炉穴群が無数に発見された大古里遺跡や大間木遺跡、前期の大規模な集落跡として、過去に数度にわたる調査が繰り返されている井沼方遺跡、全国的にも珍しい土偶の装飾が付いた土器が出土した馬場小室山遺跡、芝川沿いの低地から丸木舟が出土した大道東遺跡など枚挙に暇がありません。

中尾緑島遺跡では発掘調査の結果、縄文時代前期の竪穴住居跡や土壙、縄文時代後期の土器埋設遺構が発見されました。この他、近世の溝跡などが発見され、当地域における原始および近世の生活の様子を知る貴重な資料が得られました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅都市部都市整備課、埼玉県浦和土木事務所、浦和市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成12年7月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　中野健一

例 言

1．本書は、埼玉県浦和市中尾2541番地に所在する中尾緑島遺跡の報告書である。

2．発掘調査に対する指示通知は、平成８年２月９日付け教文２-178号である。

遺跡コードは01-179、遺跡名の略号は NKOMS である。

3．発掘調査は、都市計画道路大宮東京線建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県住宅都市部都市整備課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査は、細田勝・渡辺清志が担当し、平成７年12月１日から平成８年３月31日まで実施した。

5．報告書作成作業は渡辺清志が担当し、平成12年度に実施した。

6．発掘調査および整理事業の組織は３ページに記した。

7．出土品の整理および図版の作成は渡辺が行った。発掘調査時の写真撮影は細田勝・渡辺清志が行い、遺物の撮影は渡辺が行った。

8．遺跡の基準点測量と航空写真は中央航業株式会社に委託した。

9．本書の編集は渡辺が担当した。

10. 本書に掲載した資料は平成12年８月以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

11. 本書の執筆はＩ－１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、それ以外を渡辺が行った。

凡例

1．本書におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方向指示は、すべて座標北を表す。

2．本書における遺構の表現は、便宜上、下記の略号を表記した部分がある。

ＳＪ：住居跡　　ＳＫ：土壙

ＳＤ：溝

3．遺構・遺物の実測図の縮尺は、原則として下記の通りである。

遺構：住居跡	1／60
土壙	1／30
溝	1／120
遺物：縄文時代土器実測図	1／4
縄文時代土器拓影図	1／3
旧石器時代石器	1／1・2／3
縄文時代石器	2／3
石製品	1／2

その他、第Ⅰ章の埼玉県の地形図・周辺の遺跡、第Ⅲ章の遺跡の位置等については、その都度スケールを貼付した。本書に貼付した地形図は、建設省国土地理院発行の1／25000の地形図を使用した。

目次

口絵写真
序
例言
凡例
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1．調査に至る経過……1
　2．発掘調査と整理の経過……2
　3．発掘調査、整理・報告書刊行の組織……3
Ⅱ　立地と環境……4
Ⅲ　遺跡の概要……8
Ⅳ　発見された遺構と遺物……10
　1．旧石器時代……10
　(1)　グリッド出土遺物……10
　2．縄文時代……10
　(1)　竪穴住居跡……10
　(2)　土器埋設遺構……25
　(3)　土壙……26
　(4)　グリッド出土遺物……28
　3．中・近世……31
　(1)　溝……31
Ⅴ　結語……32

挿図目次

第1図　埼玉県の地形図……4
第2図　周辺の遺跡……5
第3図　周辺遺跡の変遷……6
第4図　遺跡の位置……7
第5図　調査区全体図……9
第6図　旧石器時代の遺物……10
第7図　第1号住居跡……11
第8図　第1号住居跡遺物分布図……12
第9図　第1号住居跡出土遺物……12
第10図　第2号住居跡……13
第11図　第2号住居跡遺物分布図……14
第12図　第2号住居跡土器接合図……15
第13図　第2号住居跡出土遺物1)……16
第14図　第2号住居跡出土遺物2)……17
第15図　第2号住居跡出土遺物3)……18
第16図　第3号住居跡……19
第17図　第3号住居跡遺物分布図……20
第18図　第3号住居跡出土遺物……21
第19図　第4号住居跡……22
第20図　第4号住居跡遺物分布図……23
第21図　第4号住居跡出土遺物……24
第22図　第1号埋甕……25
第23図　第1号埋甕出土遺物……25
第24図　土壙一覧……27
第25図　土壙出土遺物……28
第26図　グリッド出土遺物……29
第27図　溝一覧……30
第28図　参考図版……35

表目次

第1表　第1号住居跡柱穴一覧表……11
第2表　第2号住居跡柱穴一覧表……13
第3表　第3号住居跡柱穴一覧表……19
第4表　第4号住居跡柱穴一覧表……22

図版目次

図版1　中尾緑島遺跡全景　北から
図版2　調査区北半部分　南から
調査区南半部分　南から
第1号住居跡　南東から
第2号住居跡　南から
第2号住居跡遺物出土状況　南から
第2号住居跡　三角形石製品出土状況
図版3　第3号住居跡　南から
第3号住居跡遺物出土状況　南から
第4号住居跡　北から
第1号土壙　東から
第2・4号土壙　南から
第3・7・8号土壙　南から
図版4　第5号土壙　南から
第9号土壙　南西から
第1号埋甕検出状況　北から
第1号埋甕　側面　東から
第1号埋甕　土器出土状況　南から
第1号埋甕　完掘　南から
図版5　第1号溝　東から
第2号溝　東から
第3号溝　東から
溝群　北から
調査風景　遺構検出
調査風景　第2号住居跡
図版6　旧石器時代の遺物
第2号住居跡出土土器
第2号住居跡出土土器
第2号住居跡出土土器
第2号住居跡出土石製品
第1号埋甕出土土器(1)
図版7　第1号住居跡出土土器
第2号住居跡出土土器(1)
図版8　第2号住居跡出土土器(2)
第2号住居跡出土土器(3)
図版9　第2号住居跡出土土器(4)
第3号住居跡出土土器(1)
図版10　第3号住居跡出土土器(2)
第4号住居跡出土土器(1)
図版11　第4号住居跡出土土器(2)
第1号埋甕出土土器(2)
図版12　土壙出土土器
グリッド出土土器(1)
図版13　グリッド出土土器(2)
中・近世の遺物

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県では、地域の発展を支える道路交通網を整備し、社会経済活動や日常生活における円滑化の実現を目指している。

特に、浦和市、大宮市、川口市等を中心とした地域は、首都機能を含めた高次都市機能や、次世代産業の集積拠点などを担う中央複合都市圏と位置づけられ、交通網の整備が重要な施策となっている。都市計画道路大宮東京線はこうした施策の一環として計画された。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

都市計画道路大宮東京線にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成７年１月20日付け都整第1353号で、埼玉県住宅都市部都市整備課長から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成７年10月31日付け教文第847号で、中尾緑島遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1　埋蔵文化財の所在

工事予定地内には以下の埋蔵文化財包蔵地が所在する。

名称(No.)	種　別	時　代	所　在　地
中尾緑島遺跡 (01-179)	集　落	縄　文	浦和市中尾2537他

2　取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条３の規定に基づく文化庁長官当ての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と都市整備課及び文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、平成７年12月１日から平成８年３月31日までの期間で実施することになった。

埼玉県知事から文化財保護法第57条の３の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出され、調査に先立ち、第57条１項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

中尾緑島遺跡
平成８年２月９日付け　教文第２-178号
（文化財保護課）

2．発掘調査と整理の経過

(1)　発掘調査

調査は平成７年12月１日から平成８年３月31日までの４ヶ月間実施した。

調査対象地は民家に付随する屋敷林となっており、数カ所に最近まで使用されていた地下室が口を開けていた。

調査区域内の樹木は予め伐採済みであったが、遺物が密に散布する部分は表土が比較的浅く、遺構面を傷めないようにとの配慮から、切り株の撤去は人力によって行うこととした。

現地は北西の季節風にさらされる風の通り道となっており、近隣の民家への砂塵の飛散を防ぐため、発掘作業はまず防塵ネットの敷設から開始された。

調査区は市道により南北に分断されており、周辺住民の生活道路として頻繁に利用されているため、道路部分の調査は不可能な状態であった。

道路を挟んで北を「A区」、南を「B区」と仮称したが、重機による表土掘削は南から北へと順次行った。切り株は遺構に関わるものについて極力残したが、遺構面には樹木の根や植栽による攪乱が多くみられた。

表土除去後、全体の遺構確認作業を行い、検出困難な部分についてはさらに人力による面的な掘り下げを行った。

遺構確認後、基準点測量を行い、10m方眼のグリッドを設定した。

１月上旬には遺構掘削を開始した。確認段階で遺構の候補とされた地点は多かったが、最終的には竪穴住居跡４軒、土壙９基、溝４条が調査された。また、溝の底面から土器埋設遺構１基が検出された。

２月の中旬までには遺構の掘削を完了し、記録作業に入った。

３月中旬には航空写真撮影を実施、その後一週間程度補足的な記録作業を行って現場作業を完了、遺物・図面・写真等記録類の引き上げ、事務所の撤収を行い、全ての作業を終了した。

(2)　報告書作成

資料整理・報告書作成作業は平成12年４月10日から同年５月31日まで実施した。

遺構図版は、原図の修正と平・断面図の照合を行い、第二原図を作成した。また、土層説明の文章は表現・書式を統一のうえ、パソコン入力を行った。

遺物分布図は、現場で作成した平面分布図と遺物台帳をもとに垂直分布図を作成し、修正・照合のうえ、第二原図を作成した。

４月中旬から、完成した第二原図をスキャナーでパソコンに取り込み、画像処理ソフトを用いて版下を作成した。

その後数度にわたるチェックを経て、完成した図版はCD-ROMに保存した。

遺物は４月当初に洗浄・注記作業を行い、その後土器の復元作業を行った。

復元された土器は、全容を推定しうるものについては実測し、それ以下の破片資料については代表的なものを選別して、拓本の採取・断面実測を行った。

石器は、まず自然礫などの選り分けを行い、その後実測・トレースを行った。

５月上旬から遺物図版の作成を開始した。完成した実測図・拓本を２倍版用のフィルムに貼り込んで版下を作成し、写植・上掛けを施した。

遺物の写真撮影は５月上旬に行った。写真は必要なものをすべて紙焼きし、トリミングの指定を行った。

５月上旬から文字原稿の執筆を開始、５月後半には必要な原稿・図版をほぼ揃え、割付を作成した。５月末に入稿し、校正作業を経て８月に報告書を刊行した。

3．発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) **発掘調査**（平成７年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	宮田真也
専務理事	吉川國男
常務理事兼管理部長	新井秀直
理事兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主任	長滝美智子
主事	菊池　久
専門調査員兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	高橋一夫
調査第二課長	大和　修
主任調査員	細田　勝
調査員	渡辺清志

(2) **整理事業**（平成12年度）

理事長	中野健一
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓
管理部	
管理部副部長	関野栄一
主席（庶務担当）	阿部正浩
主席（施設担当）	野中廣幸
主任	菊池　久
主席（経理担当）	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
調査部	
調査部長	高橋一夫
資料副部長	鈴木敏昭
主席調査員（資料整理担当）	礒崎　一
主任調査員	渡辺清志

Ⅱ　立地と環境

1．地理的環境

大宮台地は埼玉平野のほぼ中央に位置し、荒川低地と中川低地にはさまれた部分の総称である。

この台地は、芝川・鴨川などの小河川によって安行台地・白岡台地等、さらに細かく区分されるが、就中荒川と綾瀬川によって東西を区画される部分を狭義の大宮台地と称する。狭義の大宮台地は、北は鴻巣市域から南は浦和市南部までの約30kmにわたって長く延びている。

台地南縁にあたる浦和市南東部は標高14～17mで地質的には武蔵野Ⅰ面とⅡ面にわたっている。南東の安行台地との間は芝川低地によって分断されている。

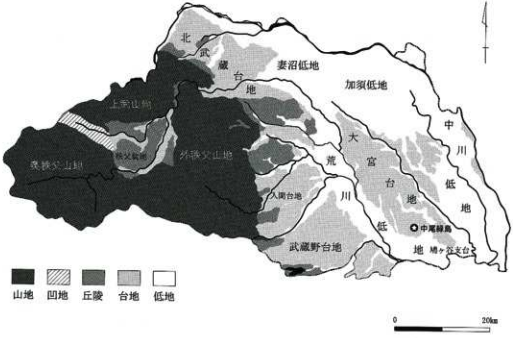
台地には南から別所・白幡・太田窪・大谷口・中尾・大間木などの小谷が深く入り込んでいる。これらのうち、大谷口谷（現：大谷口排水路）と中尾谷（現：中尾排水路）にはさまれた大字広ヶ谷戸の一帯は、南北に長い尾根状の台地となっている。中尾縁島遺跡は、大きくはこの尾根状台地の上に位置している。

この尾根状地形の東縁に、中尾谷から入り込む小谷によって南北から侵食された半島状の部分が存在する。

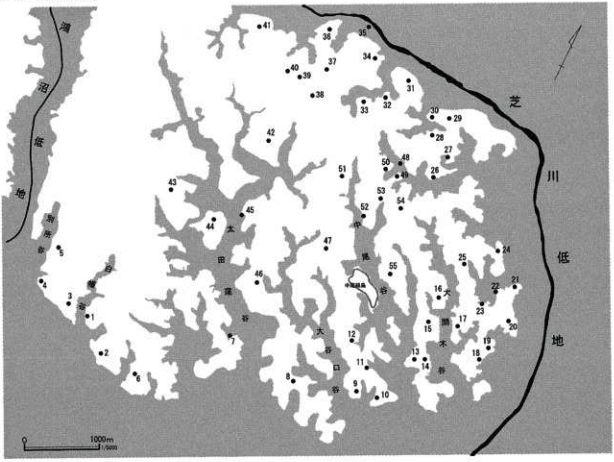
「縁島」の語源となったと思われるこの半島状地形は、南西にくるぶし、北西に踵、南東につま先を向けた人の足を思わせる形をしており、本体の台地に接続する「くるぶし」部分が最も高く、「つま先」である南に向かって緩やかに傾斜している。

中尾縁島遺跡は、この半島状地形のほぼ全面を占めている。

第１図　埼玉県の地形図



第２図　周辺の遺跡



1	白幡本宿	旧石器、縄文中期、弥生後期、古墳
2	白幡上ノ台	縄文後期
3	別所	縄文中期、弥生後期、古墳
4	別所西野台	縄文早～中期、弥生、古墳後期
5	別所子野上	弥生後期、古墳後期
6	根岸	縄文早期、古墳後期、中世
7	大谷場下町	旧石器、縄文早・前・後期
8	善病南	旧石器、縄文後期
9	明花上ノ台	縄文早・前期
10	明花向	旧石器、縄文早期、弥生中～後期
11	明花東	縄文後期初頭
12	広ヶ谷戸稲荷越	縄文中・後期
13	井沼方馬場	縄文早期
14	井沼方	旧石器、縄文早～後期、弥生後期
15	大北	旧石器、縄文早期・中期、弥生
16	大関本内谷	旧石器、縄文早・中・後期
17	西谷	縄文早・後期、弥生
18	宮前	縄文早・後期、弥生、古墳
19	吉場	縄文早期、弥生中期
20	和田南	縄文
21	和田北	旧石器、縄文早期
22	和田	縄文早・前期
23	和田西	縄文早・前期、平安
24	梅所	旧石器、縄文早・前期、弥生後期
25	会ノ谷	縄文早・後期、弥生後期
26	松木	旧石器、縄文早期、弥生中期
27	松木北	縄文早・前期、弥生後期
28	馬場小室山	縄文早～晩期
29	馬場東	縄文早期
30	馬場北	旧石器、縄文早・中期
31	北宿	旧石器、縄文早・前期
32	北宿南	旧石器
33	北宿西	旧石器、縄文早・後・晩期
34	大古里	縄文早・前・後期
35	大道東	縄文中期
36	中原後	縄文前・中期、平安
37	山崎貝塚	縄文前期
38	中原前	縄文後・晩期
39	前窪	縄文早・後・晩期
40	前窪西	縄文後期
41	皇山	縄文前期　奈良
42	前島	弥生後期
43	本太四丁目	旧石器　縄文早・後期
44	本太東原	縄文早期
45	東原	旧石器、縄文早・中期、平安
46	源詰入	縄文中期
47	原山坊ノ在家	縄文中期
48	三室	旧石器
49	南宿南	縄文早期
50	南宿北	縄文早期
51	西宿南	縄文早期
52	駒彩	縄文早・前期
53	駒彩北	縄文中・後期
54	駒前	縄文早～後期、平安
55	中尾中丸	縄文後期

2．周辺の遺跡

第２図に浦和西部台地の全体の遺跡分布、第３図に縄文時代における遺跡分布の変遷を表した。

縄文時代の遺跡は、早期末葉に属するものが数的に最も多く、竪穴住居跡がほとんど検出されず、大掛かりな炉穴群が形成されるものを典型とする。分布は台地縁辺から谷の奥部まで、ほぼ全域にわたっている。

前期には、遺跡の分布が台地縁辺に集中する。井沼方遺跡（14）はこの時期の大規模な集落跡として知られている。

また、この時期の集落は、早期末葉の炉穴群から継続して営まれる例が多い。

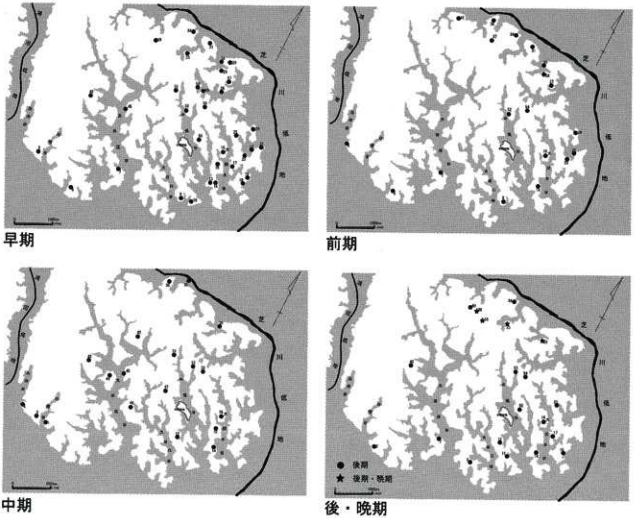
中期には一転して谷奥部への展開が顕著になる。馬場北遺跡（30）、諏訪入遺跡（46）などで、この時期の集落の調査が行なわれている。

後期も谷筋を中心とした展開が主体である。住居跡は、明花東遺跡（11）で後期初頭、後期前葉～中葉のものが中尾中丸遺跡（55）などで確認されている。

また、「袋状ピット」「フラスコ状ピット」などと呼ばれる、口径に対し内径の大きな土壙が頻繁に出現し、なかには深さ２ｍを超えるものも見つかっている。

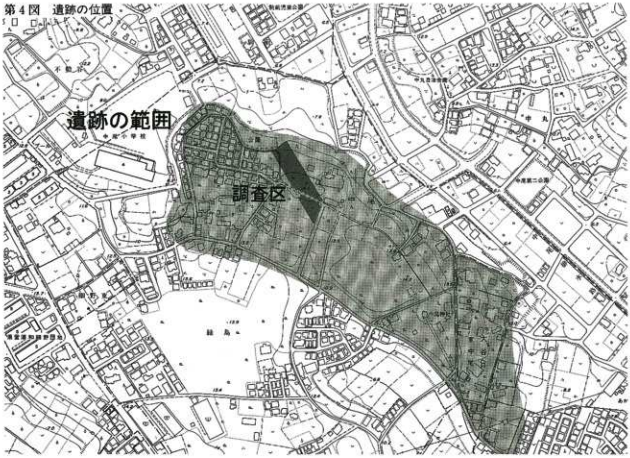
晩期の遺跡分布は後期のそれに重複するが、台地北縁部に集中する傾向が観て取れる。馬場小室山遺跡（28）からは人面土器・人体文土器をはじめ、多量の土製品類が出土している。

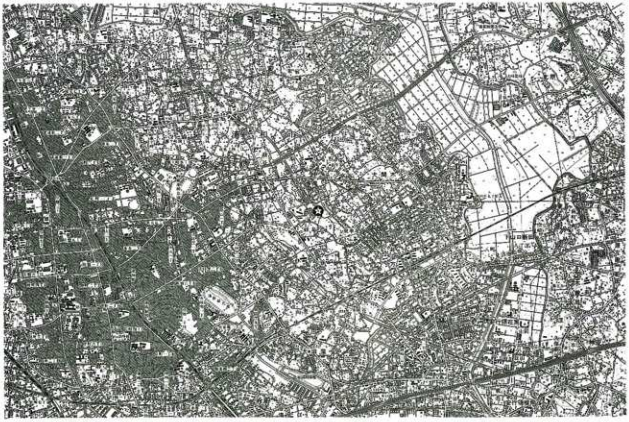
第３図　周辺遺跡の変遷



早期　前期　中期　後・晩期

第４図　遺跡の位置





Ⅲ　遺跡の概要

今回調査した地点は、ＪＲ東浦和駅の北西に位置し、大宮東京線（予定）と国道463号線が交差する場所から、800mあまり南下した位置にあたる。

中尾緑島遺跡は半島状の台地全面を覆っており、今回調査したのはその北のはずれである。試掘の際は縄文時代前期を中心とした遺物が出土し、また、ローム上に遺構と思われる焼土を伴う染みが観察された。

発掘調査の結果確認された遺構は、縄文時代前期の竪穴住居跡４軒、土壙９基、縄文時代後期の土器埋設遺構１基、近世の溝４条であった。このほか、敷地内には近代以降のものとみられる地下室が数カ所口を開けていた。

調査区の北半部は屋敷林であったが、市道をはさんだ南半部は植木畑であり、植栽による攪乱はローム上面におよんでいた。このため、この部分に存在した遺構はほとんどが破壊されたものと思われた。

住居跡は調査区の中央から南半で検出された。グリッドで言うとＤラインからＨラインにかけての範囲で、台地の最高点を中心とした遺構の分布が考えられる。

いずれも隅丸長方形の竪穴住居跡で、主軸は東西を指すものが中心であった。

土器埋設遺構は、近世の溝の底面から検出されたもので、後期初頭の住居跡の残欠と考えられた。

土壙は大半が直径１ｍ未満の小型のもので、分布はＤ・Ｅライン上、台地の最高点付近に集中していた。遺物は少量の縄文土器片が得られたのみで、性格は不明である。

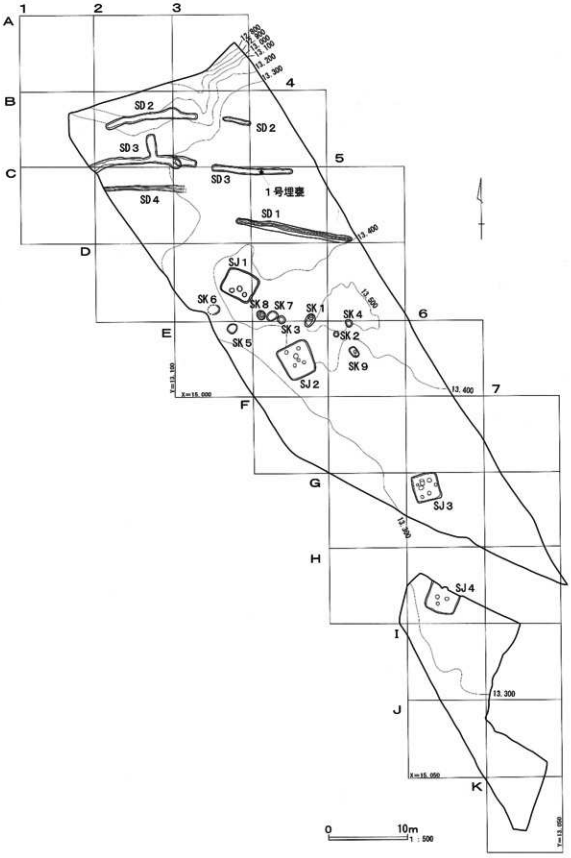
溝は耕地の根切りないし地割に伴うとみられるもので、いずれも台地の北縁に平行するようにして検出された。

遺構外の出土遺物には早期末葉から後期前葉までのものが含まれており、これらの時期の遺構が存在した可能性は捨てきれない。また、表土および縄文時代の住居跡覆土中から旧石器時代のナイフ・細石刃が出土した。このため、台地縁辺を中心にローム層の掘り下げを行ったが、遺物は発見できなかった。

中・近世の遺物は焙烙・かわらけ片などのほか、中世の瀬戸灰釉小皿一点が出土した。

今回の調査対象地からは外れるが、周辺の畑地からも土器片や丸嗣の磨製石斧などが採集されており、広範囲の遺構の存在が想定される。

第５図　調査区全体図


1
2
3
4
5
6
7
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
SD 2
SD 2
SD 3
SD 3
SD 4
1号埋甕
SD 1
SJ 1
SJ 2
SJ 3
SJ 4
SK 1
SK 2
SK 3
SK 4
SK 5
SK 6
SK 7
SK 8
SK 9
13.500
13.400
13.300
13.200
13.100
13.000
X=15.000
X=15.050
Y=13.100
Y=13.000
0
10m
1 : 500

Ⅳ　発見された遺構と遺物

1．旧石器時代

(1)　グリッド出土遺物（第6図）

1はナイフ形石器である。E－3グリッドから出土した。全長36mm、最大幅12mm、厚さ3mmを測り、基部末端をわずかに欠失する。流麗なプロポーションで、基部に両側縁からの調整が施される。

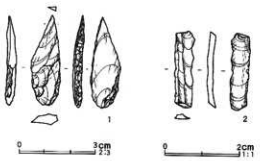
石材は珪瑞を使用する。

2は細石刃で、第3号住居跡覆土中から出土したものである。

全長20.5mm、幅5.2mm、厚さ1.3mmを測る。完形で、背面左側縁に刃こぼれが観察される。

石材は黒曜石である。

第6図　旧石器時代の遺物



2．縄文時代

(1)　竪穴住居跡

第1号住居跡（第7・8図）

D－3・4グリッドに所在する。一連の住居跡群中最も北に位置している。南縁に土壙群が並ぶが、新旧関係は不明である。

長径4.3m、短径3.7m、北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈するが、主軸線は南東～北西方向、N－31°－Eを指すものとみられる。

壁高は最も残りの良い部分で約20cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。壁溝・壁柱穴の類は検出できなかった

南西壁付近で三角形に並ぶピットを検出したが、これらのうち最も床面中央寄りに位置する1基は覆土中に焼土粒子を含んでおり、これを地床炉と判断した。被熱の度合いは少なく、火床面は存在しない。直径70cm、深さは35cm程度であった。

他の2基のピットは本住居跡の主柱穴と考えられる。主軸線を挟んで左右に対置され、規模も比較的似通っている。柱痕は検出されなかった。

口径および深さは第1表のとおりである。

覆土中からは、少量の土器片および礫が出土した。土器は大半が遺構検出面付近からの出土である。時期は黒浜式で、全体に、比較的新しい時期に属するものと考えられる。

第1号住居跡出土遺物（第9図）

1は早期末葉の条痕文土器である。

内・外面に貝殻条痕文が施文され、胎土に多量の繊維を含む。

2～6は前期前葉の黒浜式である。

2・3は単節の縄文が施文される。2の原体は0段多条の可能性がある。胎土に少量の繊維を含むが、器面や地文の特徴はすでに諸磯式に近い。

4は無節の縄文で、原体はおそらくLLだが、直前段のLにより前段の撚りが戻りきっていない。

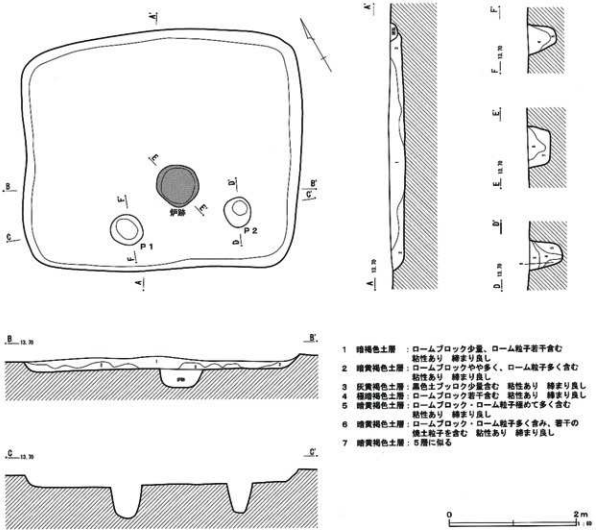
5・6は無節の縄文で、いずれも羽状縄文である。

7は半裁竹管による沈線文で、諸磯式であろう。

8・9は貝殻腹縁による刺突文が特徴的な土器である。器面には内外とも横位の荒い擦痕がみられる。

黒浜式に並行するものであろう。

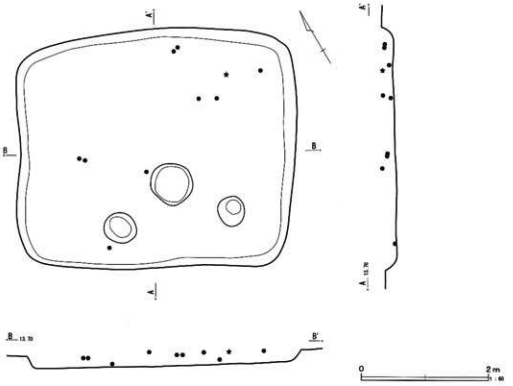
第７図　第１号住居跡



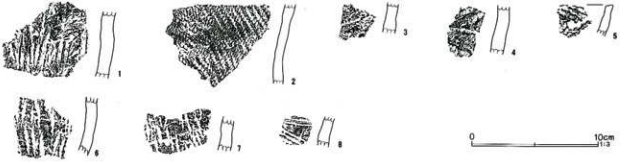
第１表　第１号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	Ｐ１	Ｐ２
口径（cm）	50	44
深さ（cm）	53	45

第8図　第1号住居跡遺物分布図



第9図　第1号住居跡出土遺物



第２号住居跡（第10図～第12図）

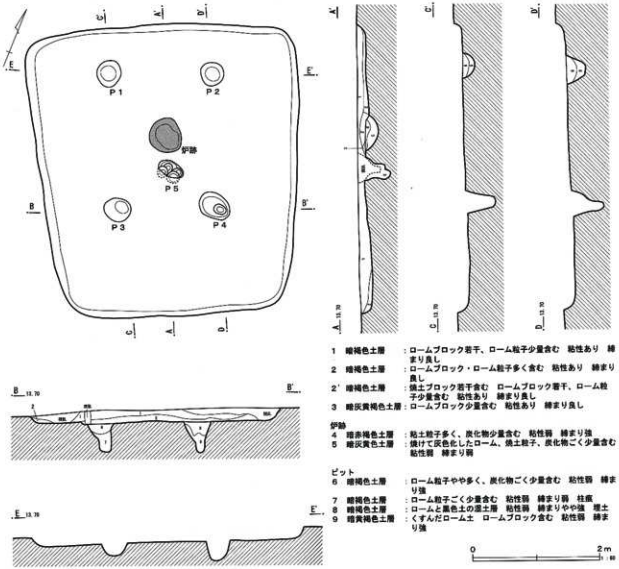
Ｅ－４グリッドに所在する。長径4.56m、短径４m、北東にやや開いた逆台形を呈し、主軸はＮ－24°－Ｗを指す。壁高は残りの良い部分で約20cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、壁溝・壁柱穴の類は検出できなかった。

床面は平坦で、中央から前面（南壁）にかけての部分が、南向きに緩やかに傾斜している。貼り床は検出できなかったが、炉跡周辺が若干硬くなっている。

覆土は上下２層からなっており、樹木や植栽による撹乱がはなはだしい。

主軸線上やや奥壁寄りに炉跡が検出された。不整円形の地床炉で、最大径55cmを測る。焼土の堆積は比較的薄く、10cmに満たない。

第10図　第２号住居跡



第２表　第２号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５
口径（cm）	42	38	42	50	41
深さ（cm）	19	31	44	53	42

第11図　第２号住居跡遺物分布図

柱穴は４本で、ほぼ長方形に配置される。位置関係は住居跡の四隅にほぼ対応するが、全体として奥壁に寄ったレイアウトを示している。柱穴間隔は、長軸側が約1.7m、短軸側が約1.2mである。

柱穴の規模は第２表のとおりである。奥壁よりの２基がごく浅いのに対して、前面寄りの２基が深く、柱痕部分と掘り方部分の区別がはっきりした２段の掘り込みを持っている点が注目される。

床面中央に、炉跡に隣り合うようにして１本のピットが検出された。規模はＰ３・Ｐ４等に近いが、形態や覆土の状態が異なっていて、柱穴とは考えにくいものである。

覆土はローム主体で少量の焼土や炭化物を含み、炉跡の掘り方の埋土に似通っているが、この部分で火を焚いた痕跡は認められず、単に廃絶された地床炉とは考えにくい。深さは40cmを超え、底面がいくつかの小ピットに分岐している。

覆土中から多量の土器・石器および礫が出土した。遺物の点数は、ナンバーリングしたものだけで200あまりを数える。

遺物はプラン中央に集中しており、中央では上層から下層まで満遍なく出土し、縁辺では遺構検出面付近に限定される、いわばレンズ状の分布を示している。床面直上からの遺物の出土は少ないようである。

出土土器はほとんどが縄文時代前期の黒浜式の中葉段階で、今回調査した他の住居跡より若干古いようだ。

その他、第15図に掲げた三角形石製品が出土している。

第２号住居跡出土遺物（第13図～第15図）

１～３の復元個体は、住居跡ほぼ中央、層位的には中層から遺構検出面にかけての範囲から出土したものである。

１は深鉢で、口縁部から胴部中段にかけての部分が残存している。

胴部中段に「く」の字のくびれを有し、そこから口縁にかけてほぼ直線的に開く特徴的な器形である。水平口縁で、３個１単位の鋸歯状の刻みを２単位ないし４単位配する。

地文はいわゆる附加条の縄文である。異方向のものを交互配置した羽状縄文であるが、重複や間隙の目立つ粗雑な施文状態である。

内面は横位の研磨が徹底される。

器壁は赤褐色で黒斑が目立つ。胎土に多量の繊維と白色の砂粒を混入する。

口径19.4cm、現存高12.4cmを測る。

２も深鉢で、口縁から胴下半部にかけて残存する。

水平口縁で、胴部中段の括れから口縁にかけて直線的に開く、１に類似の器形である。胴下半部が強く張り出す。

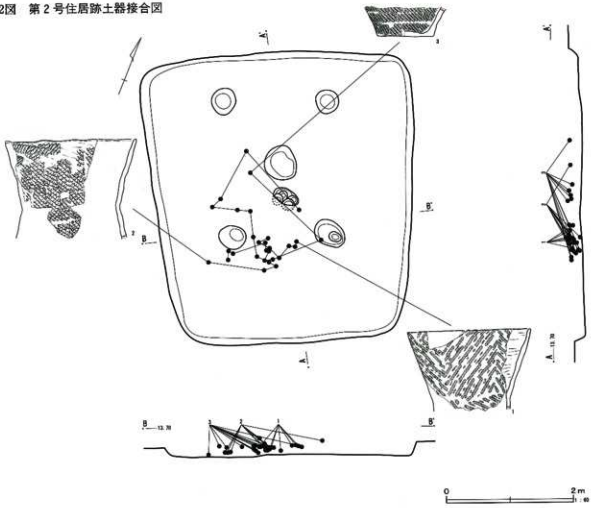
地文はＬ無節の縄文で、口縁直下では横位回転、それ以外の部分では縦位回転で施文されている。

暗茶褐色の器壁で、胎土に極めて多量の繊維を混入する。

口径20.1cm、現存高15.2cmを測る。

３は深鉢底部である。ＲＬ単節の縄文が横位回転で施文される。底径8.6cm、現存高4.5cmを測る。

第12図　第２号住居跡土器接合図



4～17は半裁竹管の爪形文がみられる破片である。

4は緩やかな波状口縁で、胴上半部が球状に張り出す。口縁下には4段の爪形文が巡る。

5は水平口縁で、爪形文により横楕円形の区画が描かれるものであろう。6・7も水平口縁で、2段の爪形文である。

8は胴部中段に「く」の字のくびれを持ち、胴上半部は球状に張り出す。地文は羽状構成の単節縄文である。

9も胴上半部で、胴部中段および口縁直下に爪形文による区画を描くものであろう。

10以下は爪形文の施文される胴部である。14・15は胎土に繊維がほとんど混入されない、諸磯a式の個体である。

18は爪形文にはならないが、半裁竹管による並行沈線で区画が描かれる。

19・20は半裁竹管による斜位の押引き文だけが重畳するもので、これも一種の爪形文であろう。19は口縁部で、施文は口端直下にまでおよんでいる。

21～24にはコンパス文がみられる。21は口縁部で、口端直下にコンパス文が巡る。24は地文附加条の羽状縄文で、胴部中段のくびれ部分にコンパス文の横帯区画が位置している。

25～29は半裁竹管による並行沈線文が描かれる、肋骨文系の土器である。

25は口縁で、断面打ち削ぎ状の口端上に、瘤状の突起が一対配されている。

24の口縁は棒状工具による沈線であるが、縦位の沈線に斜位～横位の平行沈線が交差するもので、同系列の土器であろう。26・27は横位の平行沈線である。28は縦位の平行沈線に斜位の沈線が交差する。

29は爪形文と、同一工具による幾何学モチーフが同居するもので、口縁直下の文様帯であろう。

30・31は半裁竹管による粗雑な条線文である。

32～39はへら状工具による刻目風の短沈線が一面に施文される。器肌には横位の擦痕が特徴的にみられる。

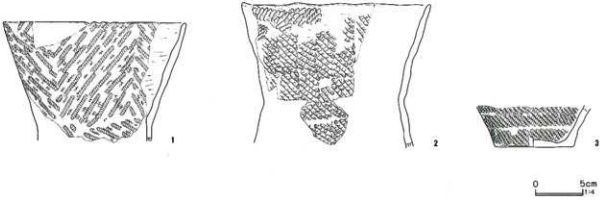
40は特徴的な結節沈線がみられる。並行沈線中に一対の刺突が並ぶもので、一種の結節沈線文であるが爪形文にはならない。施文工具は半裁竹管ではないかもしれない。

41は口縁部で、口端直下に綾繰り文が巡る。

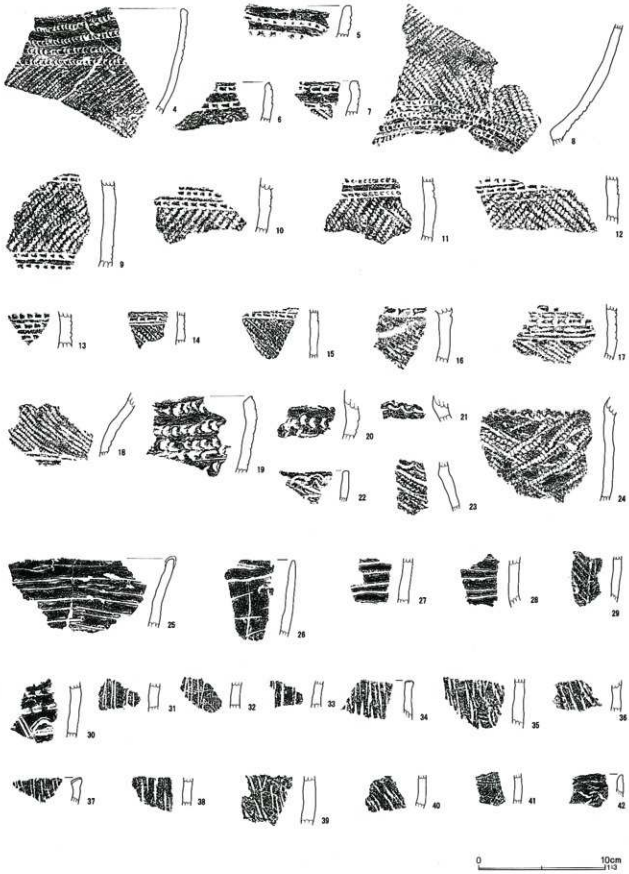
42以下は縄文のみ施文される破片である。42～53が無節、54～65が単節である。

68はＲＲの無節であろう。69はＬの無節だが、縦位回転で施文されている点が目を引く。2の同一個体であろうか。

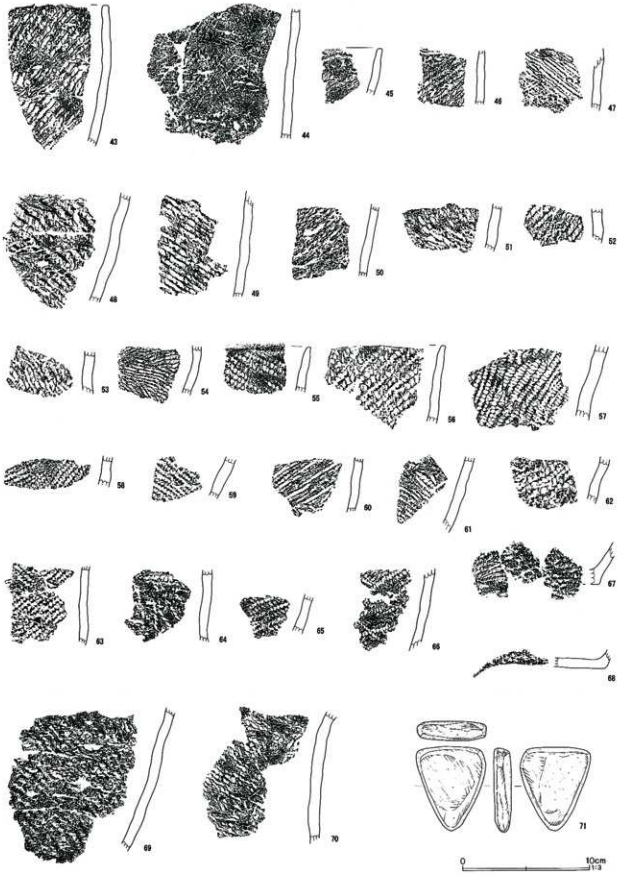
第13図　第2号住居跡出土遺物(1)



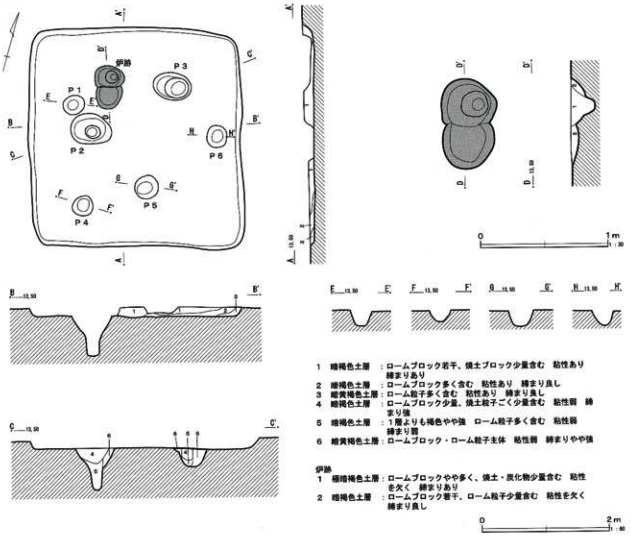
第14図　第２号住居跡出土遺物(2)



第15図　第２号住居跡出土遺物(3)



第16図　第３号住居跡



第３表　第３号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
口径（cm）	32	62	58	31	40	35
深さ（cm）	24	64	38	16	25	23

第３号住居跡（第16図・第17図）

G－6グリッドに所在する。南北に長い隅丸長方形で、長径3.42m、短径3.32mを測る。主軸方向はN－15°－Wを指す。

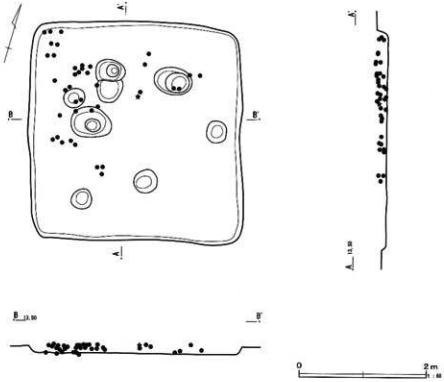
壁高は最も残りの良い部分で約15cmを測る。壁の立ち上がりは比較的はっきりしているが、壁溝・壁柱穴などの施設は検出できなかった。

床面はほぼ平坦で、中央がやや下がっている。貼り床は確認できなかった。

主軸線の西側、やや北壁寄りで炉跡を検出した。２基の地床炉が８の字状に連なっており、新旧２段階の切り合いと考えられる。

断面観察の結果、北壁寄りのものが中央寄りのものより新しいことが判明した。いずれも不整円形で、新段階のものは長径45cm・深さ19cm、中央やや東寄りに小ピット状の落ち込みを持つ。古段階のものは長径45cm・深さ７cmを測る。焼土の堆積はさほど顕著ではない。

第17図　第３号住居跡遺物分布図



床面上からは６本のピットが検出された。分布は散漫で、全てが本住居跡に属するものでない可能性もある。西壁付近で検出されたＰ２は径・深さとも十分で、主柱穴の一角をなすものとみられるが、それ以外は深さ10～20cmで、掘り方もはっきりしない。

遺物は北西コーナーから住居跡中央にかけて分布し、遺構の埋没過程で壁外から流れ込んだかのような状態を示している。土器は、縄文時代前期の黒浜式が中心である。

第３号住居跡出土遺物（第18図）

１～５は口縁部直下に半裁竹管で上下を区画した文様帯を持ち、内部に同一工具の波状文が充填される土器である。口縁がほぼ直立しており、器形の変化に乏しい円筒形の深鉢になるものとみられる。

１・２は口端まで残存する。口唇断面は先細りで、口端がわずかに面取りされる。波状文の施文される器肌には、粗い横位の擦痕が観察される。

６は縦位の爪形文で器面を分割し、左右に横楕円形の区画が描かれる。

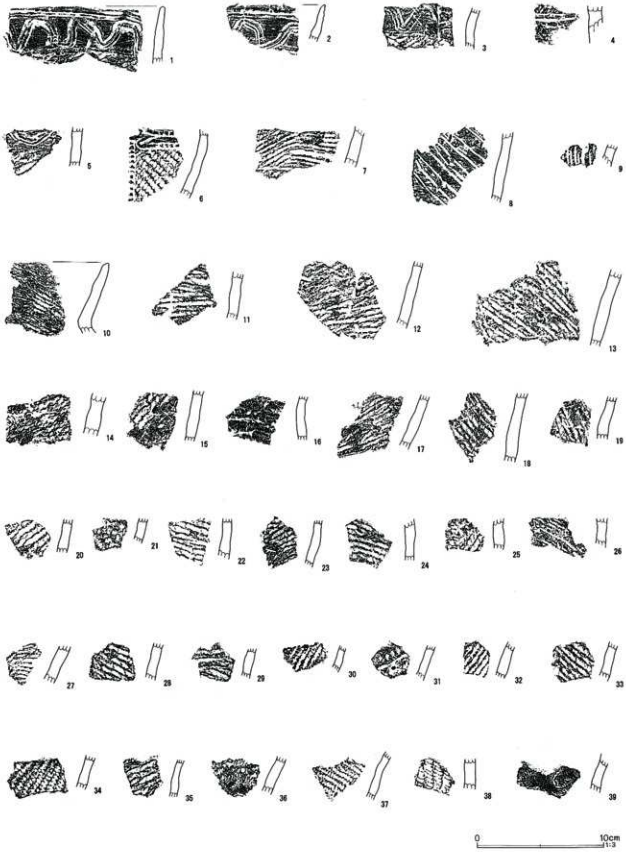
７は地文縄文上に横位の沈線が巡り、これに沿って横長の列点文が描かれる。８は棒状工具による肋骨文である。９は半裁竹管による縦位の集合沈線が施文される。

10以下は縄文のみ施文される破片である。

10～38は黒浜式である。地文は10～33が無節、34～37が単節の縄文である。25は羽状構成の無節縄文である。10は口縁で、口縁直下に「く」の字のくびれをもつ。

39は前期末～中期初頭の土器で、胎土に繊維を含まず、縦位回転の綾繰り文がみられる。

第18図　第３号住居跡出土遺物



第４号住居跡（第19図・第20図）

Ｈ－６グリッドに所在する。南北に長い隅丸長方形の竪穴住居跡であると考えられるが、北端が道路に掛かっており、全容を知ることはできなかった。

長径は不明、短径４ｍを測る。主軸線はＮ－18°－Ｅを指す。

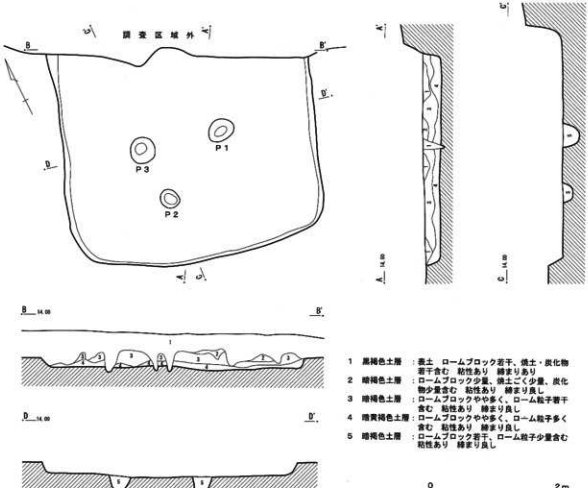
壁高は最大30cmを測る。壁の立ち上がりは比較的明確だが、壁溝・壁柱穴などの施設は検出できなかった。

覆土は概ね上下２層からなり、植栽や耕作による撹乱がはなはだしい。

床面は平坦で、中央がやや下がっている。貼り床は確認できなかった。

調査された範囲で炉跡は検出できなかった。床面中央付近に集中して３本のピットが検出された。それぞれの規模は第４表に示したとおりだが、全般に浅く、掘り方も不明確である。位置関係から、Ｐ１・Ｐ３が４本柱の一部をなす可能性が高い。

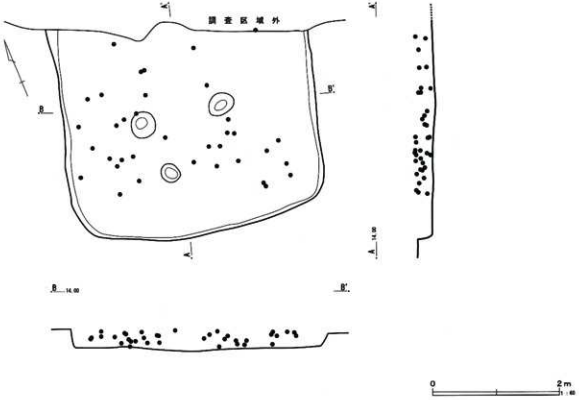
第19図　第４号住居跡



第４表　第４号住居跡柱穴一覧表

柱穴番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３
口径（cm）	42	32	41
深さ（cm）	25	17	27

第20図　第４号住居跡遺物分布図



遺物は縄文時代早期末から後期にかけての土器が出土しているが、中心となるのは前期前半の黒浜式であり、本住居跡もこの時期に属するものである可能性が高い。

第４号住居跡出土遺物（第21図）

１～５は縄文時代早期末の条痕文土器である。胎土に繊維を混入し、内・外面に貝殻条痕文を施文する。

６～26は黒浜式である。

６～16は、附加条の縄文が施文される。

６は強いくびれを持つ胴部中段で、コンパス文による横位の区画により器面が上下に分帯される。

７～９は異方向の縄文が羽状構成をとる。

12は異方向の縄文が重複する部分であろう。

17～21は無節の縄文である。17の口縁部は、口端直下まで隙間なく縄文が施文される。

22～24は単節の縄文である。23は器面の接合部とみられ、地文がなで消されて不鮮明となっている。24は羽状縄文である。

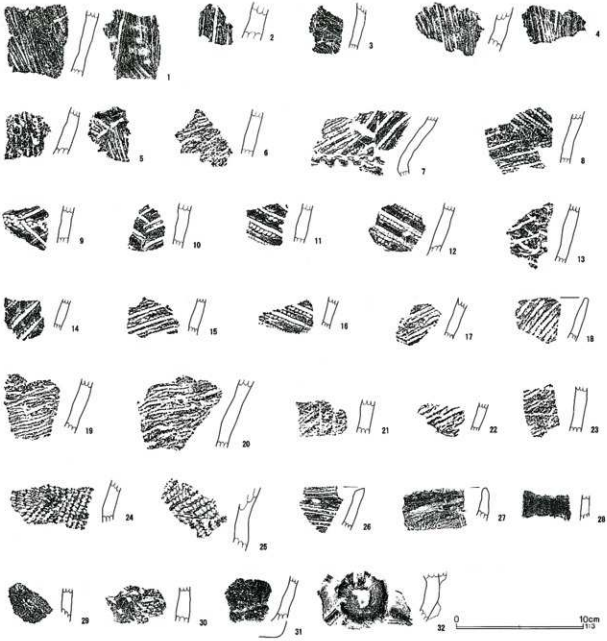
25は半裁竹管による沈線文が横位に巡るものである。26は横位の擦痕の上に、貝殻腹縁による縦位の刺突が施される。

27～30は中期初頭とみられる無文の土器で、胎土や器面の特徴の類似から一括した。胎土に小礫が目立ち、29は金雲母を含む。27の口縁は内外面に擦痕がみられる。28もこれに類似の擦痕がみられる。

31は中期末葉加曽利ＥⅢ式の胴部である。幅広の磨消し懸垂文がみられ、地文はＬＲ単節縦位回転の縄文が施文される。

32は後期称名寺式の口縁である。山形波状口縁の波頂部に、Ｓ字状の突起が付される。

第21図　第４号住居跡出土遺物



(2) 土器埋設遺構

第1号埋甕（第22図）

C－4グリッドに所在する。第3号溝に切られる。

恐らくは完形の深鉢を正位に埋設したもので、上面を溝の掘削により破壊されている。住居跡に伴う埋甕であった可能性が高いが、周辺の遺構検出面は溝および樹木の根による撹乱が激しく、柱穴その他の施設を検出することはできなかった。

土器の周囲に、埋甕埋設のための掘り方を検出した。粗掘りのピットの覆土中に土器本体の掘り方とみられる一回り小さなピットを掘りこんだ二重構造である。

外周のピットは直径39cm、深さ26cmを測り、平面不整円形、断面鍋底状である。内周のピットは逆円錐形で、底面は外周のピットよりも5cmほど低くなっている。本来この位置に土器の底部が納まっていたものであろう。

土器は縄文時代後期初頭、称名寺式の精製深鉢で、胴部中段から下だけが残存するが、周辺出土の破片中に同一個体の口縁部が存在しており、本来完形の状態で用いられていたものと考えられる。

第1号埋甕出土土器（第23図）

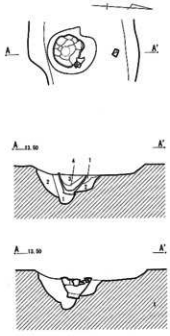
1は埋甕本体である。胴部中段から底部にかけて残存する。胴部中段に緩いくびれを持ち、胴下半部が丸く張り出し、底部にかけては急速にすぼまる。また、底部の直上に強いくびれを有する。

やや鋭利な工具を想起させる沈線で、渦巻き状の磨消しモチーフが描かれる。

モチーフは右巻き・左巻き両方が存在し、渦の開端は下方に延びて末端閉塞するものと、口端に突き当たって末端開放するものがランダムに配置されているようだ。地文はLR単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。

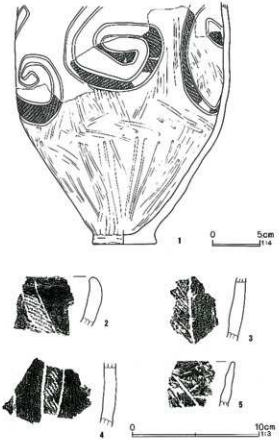
2～5は周辺出土の破片である。2～4は同一個体で、2は口縁部である。5は異個体の口縁である。

第22図　第1号埋甕



1　暗褐色土層　：ローム粒子少量含む　粘性弱　締まりやや強
2　暗黄褐色土層　：ロームブロック多く含む　粘性に富む　締まり強
3　暗黄褐色土層　：ロームブロック若干含む　粘性に富む　締まり強
4　極暗黄褐色土層：ロームブロックごく少量、ローム粒子少量含む　粘性に富む　締まり良し

第23図　第1号埋甕出土遺物



(3) 土壙（第24図）

D・E－3～5グリッドを中心として、9基の土壙が検出された。

土壙群の検出されたのは、中尾緑島遺跡の所在する尾根状地形のうち最も高い、標高13.400～13.500mラインにあたっている。

また、全部で4軒検出された竪穴住居跡のうちの2軒がこの一角から検出されており、土壙群は2軒の住居跡の間を縫うようにして、ほぼ東西方向に展開している。

第1号土壙・第6号土壙のみ縄文時代前期黒浜式の土器片が出土しているが、それ以外の7基についても規模や覆土の状況が似通っており、同時期の遺構と考えられる。

第1号土壙

D－4・E－4グリッドに所在する。長径1.17m・短径0.71mの長楕円形の土壙で、長軸方向はN－22°－Wを指す。深さは21cmを測る。

底面は平坦で、中央がやや下がっている。壁の立ち上がりは緩やかである。

長軸の一端に柱穴状の小ピットを検出した。平面楕円形で、直径35cm、深さ42cmを測る。柱痕は明確ではないが、本土壙とは別の遺構の一部である可能性もある。

遺物は縄文時代前期黒浜式の土器片数点が出土している。

第2号土壙

E－5グリッドに所在する。

長径43cmの不整円形の土壙で、深さは20cmを測る。底面は平坦で壁は急角度で立ち上がり、断面鍋底状である。

遺物は出土していない。

第3号土壙

D－4・E－4グリッドに所在する。第7号土壙に隣接する。

長径74cm・短径60cmの楕円径の土壙で、長軸方向はN－4°－Wを指す。深さは13cmを測る。底面は平坦で壁は急角度で立ち上がり、断面鍋底状である。

遺物は出土していない。

第4号土壙

E－5グリッドに所在する。長径56cmの不整円形の土壙で、深さは15cmである。

底面は平坦で壁は急角度で立ち上がり、断面鍋底状を呈する。

遺物は出土していない。

第5号土壙

E－3グリッドに所在する。長径86cm・短径69cmの楕円形の土壙で、長軸方向はN－33°－Eを指す。深さは20cmを測る。

底面平坦で、北東方向に下がっている。壁の立ち上がりはやや緩やかである。

遺物は出土していない。

第6号土壙

D－3グリッドに所在する。現存部分の最大径は78cmを測る。楕円形の土壙であると思われるが、全体の約半分を樹木根による攪乱で破壊されている。残存部分から判断して、主軸方向はN－54°－Eを指すものと推測される。

底面は丸底で、壁の立ち上がりも緩やかである。

遺物は縄文時代前期黒浜式の土器片数点が出土している。

第7号土壙

D－4・E－4グリッドに所在する。第3号土壙・第8号土壙に隣接する。

長径98cm・短径71cmの楕円形の土壙である。深さは10cmを測る。

底面平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

遺物は出土していない。

第8号土壙

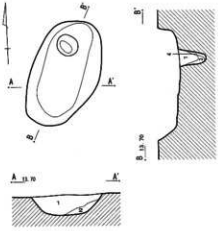
D－4グリッドに所在する。第7号土壙に隣接する。

長径77cm・短径69cmの楕円形の土壙で、長軸方向N－24°－Wを指す。深さは35cmを測る。

底面は丸底で、周縁にテラス状の部分のある二段の掘り込みを持つ。

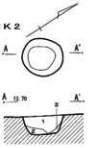
第24図　土壌一覧

SK1



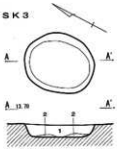
1　暗褐色土層　：ローム粒子少量　炭化物やや少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗黄褐色土層：廃棄土　くすんだローム主体　粘性弱　締まり強
3　暗褐色土層　：ローム粒子多く、ロームブロック含む　粘性やや強　締まり強　粒底か
4　暗黄褐色土層：ローム主体　粘性やや強　締まり強

SK2



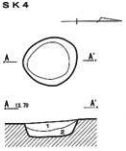
1　暗褐色土層　：ローム粒子少量、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗黄褐色土層：1層を含む　ローム主体層　粘性弱　締まり強

SK3



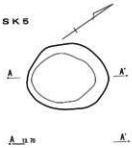
1　暗褐色土層　：ローム粒子少量、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗黄褐色土層：1層を含む　ローム主体層　粘性弱　締まり強

SK4



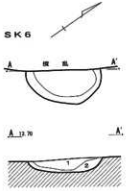
1　暗褐色土層　：ローム粒子少量、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗黄褐色土層：1層を含む　ローム主体層　粘性弱　締まり強

SK5



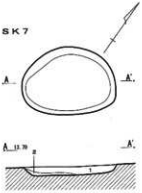
1　暗褐色土層　：ローム粒子少量、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗黄褐色土層：ローム粒子多く含む　粘性弱　締まり強　くすんだローム土

SK6



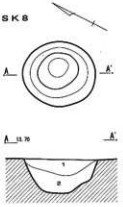
1　暗褐色土層　：ローム粒子少量、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗黄褐色土層：ローム粒子多量含む　粘性弱　締まり強　くすんだローム土

SK7



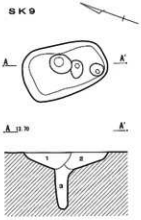
1　暗褐色土層　：ローム粒子少量、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗黄褐色土層：1層を含む　ローム主体層　粘性弱　締まり強

SK8



1　黒褐色土層：ローム粒子少量、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強
2　暗褐色土層：ローム粒子やや多く、炭化物ごく少量含む　粘性弱　締まり強

SK9



1　黄褐色土層　：再堆積ローム
2　暗黄褐色土層：ローム粒子多く含む　粘性あり　締まり良し
3　暗褐色土層　：ロームブロック・ローム粒子多く含む　粘性に富む　締まり良し

0　1m
1：30

第25図　土壙出土遺物

遺物は出土していない。

第9号土壙

E－5グリッドに所在する。長辺89cm・短辺55cmの隅丸長方形の土壙で、長軸方向N－38°－Wを指す。

底面に3基のピットを検出した。南寄りの2基は深さ10cmに満たない小規模なものだが、残る1基は直径30cm・深さ62cmを測る。

遺物は出土していない。

土壙出土遺物（第25図）

1・2は第1号土壙、3～5は第6号土壙出土土器である。

1は早期前葉の稲荷台式の胴部である。器面に絡条体によるやわらかな条痕が観察される。

2は前期黒浜式である。器面に半裁竹管による縦位の集合沈線が施文される。胎土には若干の繊維を含む。焼成は良好である。

3は黒浜式の口縁部である。口唇断面角頭棒状を呈し、へら状工具によって丁寧に面取りが施される。

地文はRL単節横位回転の縄文である。

4も黒浜式で、L無節の縄文が横位回転で施文される。5は中期の土器とみられ、厚手の器壁で、L無節の縄文が縦位回転で施文される。

(4)　グリッド出土遺物（第26図）

1・2は早期末葉の条痕文土器である。

3～20は前期前葉の黒浜式である。いずれも胎土に繊維が混入される。

1の口縁部は、RL単節の縄文が横位回転で施文される。口唇断面角頭棒状で丁寧に面取りがなされ、地文は口端上にも施される。

4～12は無節の縄文、13・14は単節の縄文である。15・16は附加条の縄文が施文される。

17は半裁竹管による沈線で、肋骨文が描かれる。18はへら状工具による刻み様の短沈線が一面に施文される。19は貝殻腹縁による縦位の刺突文である。20は無文の口縁部である。

21～27は諸磯式である。21・22は半裁竹管による集合沈線で器面が区画される諸磯b式、23～26はこれに伴う粗製土器であろう。27は諸磯c式である。

28～31は前期末葉の十三菩提式である。28は口端上に細い粘土紐により、横8の字上の貼り付け文が施される。29も類似の浮線文で、大半が剥落している。

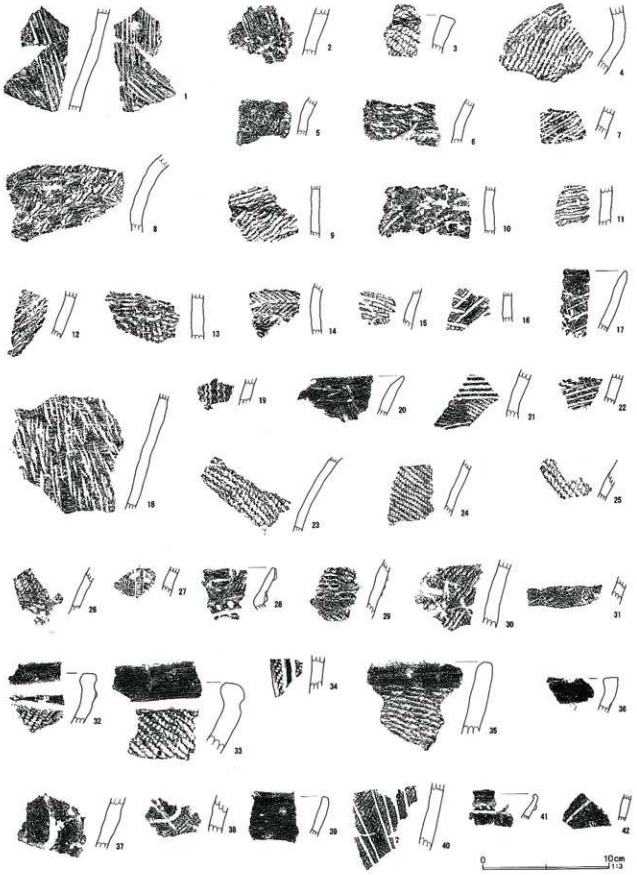
30・31は地文部で、30は細密な無節縄文、31は縦位の綾繰り文がみられる。

32～36は中期末葉の加曽利EⅢ式である。

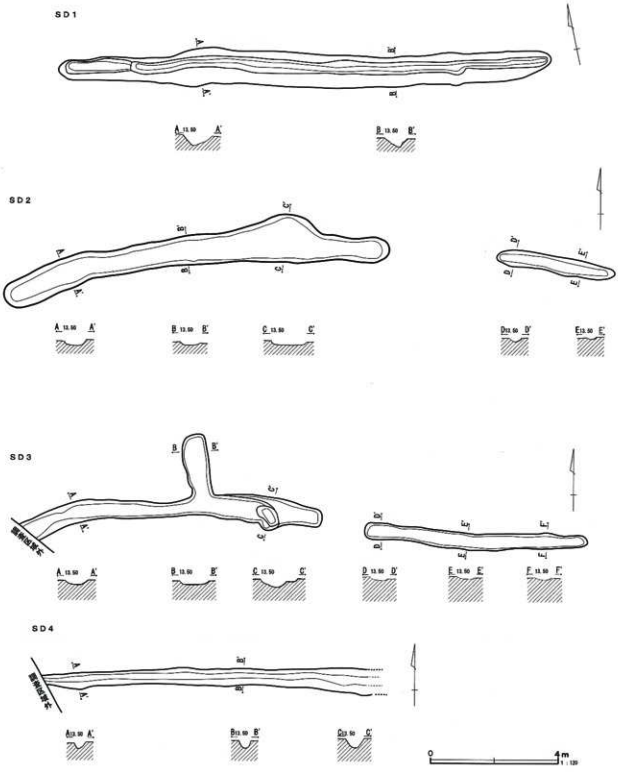
37・38は後期初頭の称名寺式である。37は古段階のもので、太い沈線により器壁が内面に押し出される。38は磨消縄文で、LR単節の縄文が充填施文される。

39・40は後期前葉の堀之内1式、41・42は堀之内2式である。

第26図　グリッド出土遺物



第27図　溝一覧


SD1
A 13.50 A'
B 13.50 B'
SD2
A 13.50 A'
B 13.50 B'
C 13.50 C'
D 13.50 D'
E 13.50 E'
SD3
B
B'
A 13.50 A'
B 13.50 B'
C 13.50 C'
D 13.50 D'
E 13.50 E'
F 13.50 F'
SD4
A 13.50 A'
B 13.50 B'
C 13.50 C'
0
4m
1:120

3．中・近世

(1)　溝（第27図）

B・C－2～4グリッド周辺から、4条の溝が検出された。台地北縁の崖に平行するようにして、3～7m間隔でほぼ東西に走っており、一部ではこれに直交する溝がみられる。

調査区北半には、農道に伴う切り通しが南北に走っていて、検出された溝群をほぼ中央で寸断している。

覆土中からはいずれも縄文土器の小破片が少量づつ出土していて、これらの溝に直接伴う遺物は存在しないが、形態や覆土の状態などから判断して、近世以降に耕作地の根切りなどのために掘られたものと考えられる。

第1号溝

C－3～5に所在する。

ほぼ直線的に走る溝で、全長15.5m、最大幅1.23m、深さ30cmを測る。走行方向はN－79°－Wを指す。

いわゆる薬研状の溝で、断面Y字状を呈する。両端は次第に浅くなるが、西端については農道切り通しによって破壊されたものと考えられる。

第2号溝

B－2・3グリッドに所在する。

北を頂点とする緩やかな弧を描いて東西に延びており、総延長は15.9m、最大幅1.5m、深さ18cmを測る。中央よりやや東を農道切り通しによって切られている。両端は次第に浅くなる。

第3号溝

B－1～4・C－1～4グリッドに所在する。第1号埋甕を切っており、また、中央部分を農道切り通しによって切られている。

緩やかなS字を描いて東西に延びており、総延長16.4m、最大幅1.5m、深さ18cmを測る。

本体部分の走行方向はN－87°－Wを指す。

B－2グリッド南東部分で直交方向に分岐し、1.8mあまり北へと延びている。

第4号溝

C－2・C－3グリッドに所在する。東端を農道切り通しに切られ、西端は調査区域外に延びている。

直線的にほぼ東西に延びる溝で、総延長10.2m、最大幅0.84m、深さ27cmを測る。

V　結語

1．三角形石製品を巡って

第２号住居跡からは、やや風変わりな石製品が出土した。紙幅の都合から本文中で触れることができなかったので、本章であらためて詳述したい。

第２号住居跡の黒浜式土器

まず、問題の土製品を出土した住居跡の時期について簡単に触れておく。

第２号住居跡からは、多量の土器片が出土した。そのいずれもが、縄文時代前期中葉の黒浜式期のものであった。

黒浜式土器については従来多くの編年案が提示されてきたが、近年では全体を３ないし５段階に区分する細別案が定着しつつあるようだ。

第２号住居跡からは、３点の復元個体が出土した。いずれも地文のみの個体であるが、特に胴部から口縁にかけて復元された２個体を軸にして、本住居跡の時期と、抱える問題について簡略に述べてみたい。

１の深鉢は、黒浜式の２式から３式にかけて量を増加させる附加条の縄文が、羽状構成で施文されている。一方で、口端にみられる３単位の刻みは、関山式の口縁突起の系譜を引くものであろう。

２は無節の縄文が施文される土器であるが、胴部全体に縦位回転の縄文を施文した後に、口縁直下のみ横位回転で施文している。

黒浜式において斜方向回転の縄文が、部位によって縦位回転に近づく例は珍しくないが、本個体については明確に施文方向の使い分けを意識しているものとおもわれる。

仮に、口縁直下の横位施文帯を文様帯の表現であると仮定した場合、胴部への縦位施文は、器面を縦位に分割する意図のあらわれとみることができ、例えば肋骨文系の土器群に顕著に表れるような、器面を上下に貫く文様意匠との関連を指摘することができよう。

以上、２個体の土器はそれぞれに新旧の属性を併せ持っているが、附加条縄文の明らかな存在、さらに、縦位区画・肋骨文系の土器群との連鎖の可能性という２点をもって、３細分案の中段階（５細分案の第３段階目）のものと考えて良いだろう。

破片資料中には、関山式の系譜を引くループ文や整然とした羽状縄文がみられず、文様は素朴な爪形文列や肋骨文が主体で、地文には単節・無節のほか、少量の附加条縄文がみられる。さらに、新段階に特徴的なユニオンジャック風の多帯構成や、無繊維の土器の混在がみられない等、やはり中段階の様相を示していよう。

なお、第14図34～39には、箆状工具を用いた雨垂れ状の刺突文がみられる。擦痕を残す器壁の類似からも、第１号住居跡出土資料中にみられる貝殻文土器（文蔵式）の〝工具違え〟とみられる。

三角形石製品

さて、問題の石製品は第15図71に掲載したもので、ここでは三角形石製品と呼ぶ。

非常にバランスのとれた二等辺三角形で、３項点はいずれも丸みを帯び、これをつなぐ３辺はそれぞれ緩やかな外向きの弧を描く。天地5.7㎝、左右4.6㎝、厚さ７㎜を測る。側面観は中央部で最も厚く、項点に近づくにしたがって徐々に薄くなっている。側縁はやや丸みを帯びた整形がなされており、断面は三味線胴状を呈する。

表裏および側面に擦痕が観察されるが、それ以外に文様と呼べるものはみられない。

敲打や、特定の部分が著しく摩滅する等の使用痕がみられないため、いわゆる磨石とは性格を異にするものと考えられる。

石材はシルト質泥岩であり、多孔質で軽く、かつ軟質である。

すでに述べたように第２号住居跡出土の土器は、大半が黒浜式中段階のものであり、本資料もまた同時期のものと考えられる。

「肩パッド型」岩偶

さて、この石製品はその単純素朴な造作とはうらはらに、周辺地域には類例を見出しがたい。そこで、二等辺三角形・断面三味線胴という形状をもとに視野を広げた場合、同時期の円筒下層式分布域を中心に盛行する一種の岩偶との類似が指摘できる。

この岩偶とは、凝灰岩・泥岩・シルト岩などのやや軟質な石材を用いて、重心が一端に寄った菱形をかたちづくるものである。

左右の最大幅の部分に、内側に折り返した両腕らしき表現がみられるのが特徴で、頭部が瘤状に表現されることもあるが、顔面や乳房の表現は基本的にみられない。

この種の岩偶については、古くは村越潔氏がその存在を指摘し、さらに稲野祐介氏はこれを「肩パッド型の岩偶」と呼んで、一連の論考でその形態と大きさからバリエーションと地域性の抽出を行っている。

時期は円筒下層ａ～上層ａ式期とされる例が存在するが、前期末葉（円筒下層ｄ式期）に集中するとされる。分布は、秋田県米代川上流域・青森県岩木川上流部に集中するほか、北海道渡島半島にまで散発的に分布する。大木式文化圏には希薄とされるが、江坂輝彌氏が提示された岩手県二日市貝塚例など、「肩パッド」ではないまでも両腕の表現を持つものを射程に入れれば、その分布はさらに広がるものと考えられる。

「肩パッド型」出現の背景には、扶状耳飾や、ある種の磨製石斧に代表される、一連の擦切り石器の盛行が存在する。これは、凝灰岩・泥岩をはじめとする軟質の石材を短冊または扇状に切り分けて素材とするもので、特にこの時期の東北地方北部の日本海側では顕著にみられ、秋田県上ノ山遺跡の前期後葉の集落跡からは、燕尾型・カツオブシ型など、この種の石製品が数多く出土している。

技法の性質上、出来上がる製品のプロポーションは長方形、紡錘形、二等辺三角形、縦長の台形等が主体となる。

「肩パッド型」もまた、この製作技法にもとづいた人体表現であると考えられる。青森県大平遺跡、熊沢遺跡等の資料にみられる正中線と、つまさきへと収斂する放射状の沈線は、擦切り手法における素材分割手法との関連をうかがわせる。これは同時期の土偶には見出しがたい特徴であり、逆にこれが中期以降の土偶の体部文様を規定した可能性すら疑われる。

なお、「肩パッド型」にみられる腕状表現や、かならず上下一対となる頭部・足部の突起表現は一種の紐かけであろう。腕状表現の上下がスリットになる例がみられる点、頭部と足部の突起が常に対の状態で造形される点、腕状表現が線刻化する寅平例が明確に頭部・足部突起を持っている点からみても、この種の岩偶は紐で括って吊り下げることを前提として製作されたものであって、この特質は両肩や後頭部に貫通孔をもつ中期～後期の土偶へと受け継がれてゆくものと考えられる。

「無突起・無乳型」と三角形土製品

北海道では「肩パッド型」とほぼ時を同じくして、三角形石製品が出現する。古くは円筒下層ａ・ｂ式期にみられ、以降中期まで盛んに製作される。

「肩パッド型」と同時に出土することも多く、凝灰岩・泥岩等軟質の石材を用いる点も類似する。形態は隅丸の二等辺三角形で、頭部・両腕等一切の表現を排除する。ただし、中期には首・肩部に小突起を配するものや、肩部に一対の貫通孔を穿つ例も現れる。

また、前期段階には中央のくびれた分銅形の石製品が伴うことがあるが、これは紐で括って吊り下げることを目的としたものか、あるいは、東北地方のバイオリン形の土偶を模したものとも考えられよう。

北海道における三角形石製品、とりわけ「無突起・無乳型」のそれは、「肩パッド型」から、その用途に関わる〝吊り下げ〟という性質を削除したものであり、

形態的には中尾緑島遺跡のものに最も近いが、東北地方以南における分布が明確でない。

円筒土器文化圏の「肩パッド型」には、小型で長楕円形かつ有頭の、いわゆる男根状石製品に類似のものが伴うが、明確に二等辺三角形かつ無文の石製品が伴う例はみられない。あれほど多用な石製品を出土した上ノ山II遺跡ですら、これと同様のものは出土していない。

本州における前期の岩偶が、あくまで〝吊り下げ〟にこだわったことがわかると同時に、中尾緑島例が、北海道のものと同様に〝吊り下げ〟のための措置を持たなかったことの理由づけが問題となろう。

なお、類似のものとして、東北地方中期～後期には三角形土製品（三角形土版）が存在する。時期的には大木７ｂ～８ｂ期に特に集中し、地域的にも北は北海道、南は福島・新潟県域にまで広く展開する。阿部明彦氏の集成によれば、日本海側により多く出土するようである。大木式の伸張に併行するとの指摘もある。

正三角形で、突起や貫通孔を持たず、３辺が内寄りの弧を描く、背面にむかって反り返るなど、前期段階の一連の資料とは微妙な違いをみせるが、その唐突な出現振りからも、北海道における「肩パッド型」の異系列である三角形石製品が本州に逆輸入されたものとも考えられようか。

文化的系譜としての擦切り石器

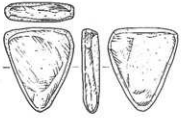
田中英司氏は、縄文前期関山式期に出現する抉入尖頭器の分析を通じ、狩猟活動の主体たる成人男子を担い手とした「抉入意匠」の文化の広域展開を想定された。

今回とりあげた擦切り技法もまた、前期後半を中心とした限られた時期に土器形式圏横断的な展開をみせる注目すべき文化要素であり、抉状耳飾はその象徴といえる。

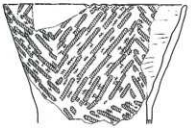
今回の調査では、上記の三角形石製品以外に、円筒土器文化圏との直接的な交流を示す要素を指摘することはできなかった。

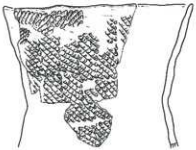
しかし、大宮台地の南端にあって、この種の特異な石製品が出土したことは、この地域における考古資料の解釈に、ある種の注意を喚起するものといえるだろう。

第28図　参考図版

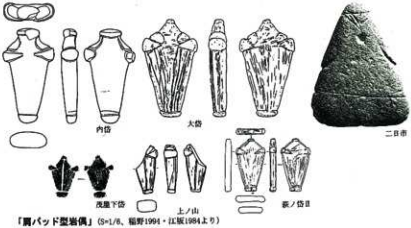


第２号住居跡出土三角形石製品（S=1/3）

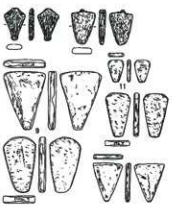




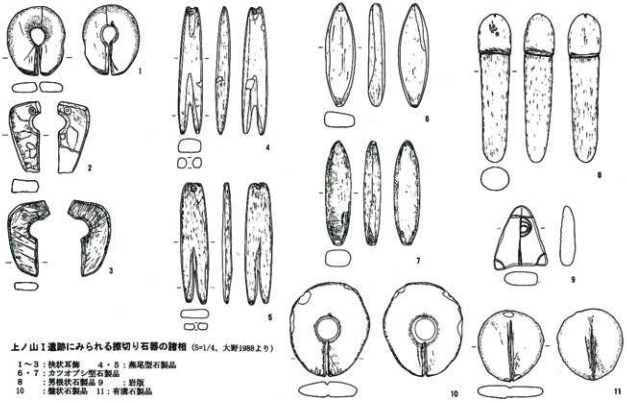
第２号住居跡出土土器（S=1/6）



「肩パッド型岩偶」（S=1/6、福野1994・江坂1984より）



北海道の三角形石製品（S=1/6、長沼1998より）



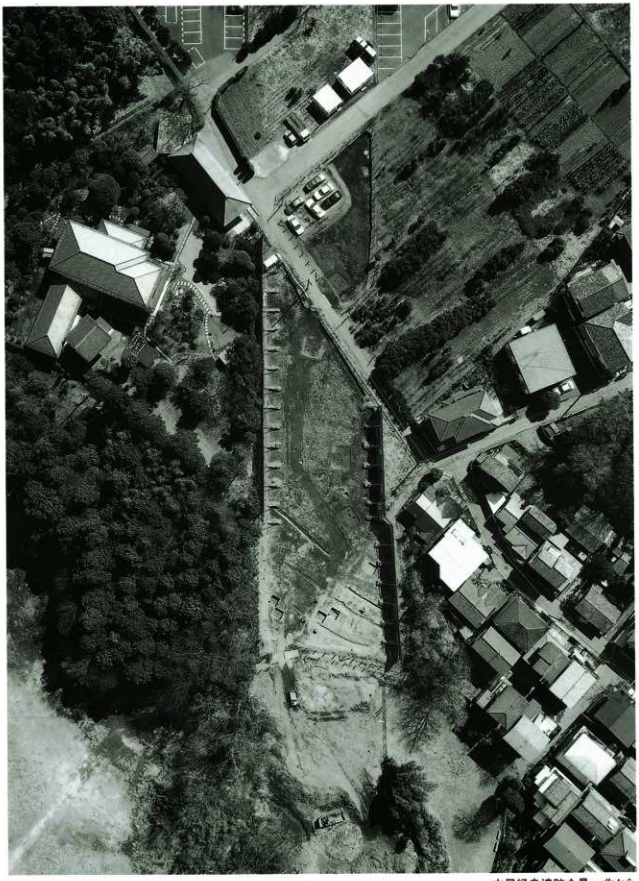
上ノ山Ⅰ遺跡にみられる擦切り石器の諸相（S=1/4、大野1988より）

1～3：挟状耳飾　4・5：燕尾型石製品
6・7：ヨツオブシ型石製品
8　：男根状石製品９　：岩版
10　：錐状石製品　11：有溝石製品

参考文献一覧

阿部明彦	1994「三角形土製品について」	土偶シンポジウム２「東北北海道の土偶　Ⅰ」発表要旨
新井和之	1999「関東地方　前期　(黒浜式)」	『縄文時代』10
石岡憲雄	1999「東北地方　前期　(円筒下層式)」	『縄文時代』10
稲野裕介	1999「遺物研究　岩偶」	『縄文時代』10
稲野裕介	1996「円筒土器に伴う岩偶(2)」	『土偶研究の地平　1』
稲野裕介	1993「円筒土器に伴う岩偶(1)」	考古学ジャーナル362
稲野裕介	1994「岩偶」	土偶シンポジウム２「東北北海道の土偶　Ⅰ」発表要旨
江坂輝彌他	1984『土偶芸術と信仰』	『古代史発掘』３
大野憲司他	1988『上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡』	東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ
小笠原雅行	1998「三内丸山遺跡Ⅸ」	青森県埋蔵文化財調査報告書　第249集
小笠原雅行	1998「三内丸山遺跡Ⅹ」	青森県埋蔵文化財調査報告書　第250集
奥野麦生	1989「黒浜式土器の系統性とその変遷」	『土曜考古』13
奥野麦生・小宮雪泰	1999「縄文時代前期の土器の諸相」	『埼嘉の縄文前期』埼葛地区文化財担当者会報告書　第３集
金子直行他	1990「シンポジウム　大木、有尾、そして黒浜」	『埼玉考古』別冊３
金子直行	1990『八木上遺跡』	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第91集
黒坂禎二他	1992『山之内清男考古資料３　上福岡貝塚資料』	『奈良国立文化財研究所史料　第33冊』
櫻田　隆	1999『池内遺跡』	秋田県文化財調査報告書　第282集
高原勇夫	1985「大宮台地南部及び周辺低地の地層区分と堆積環境」	『浦和市史」　調査報告書第17集　自然編
田中英司	1995「抉入意匠の石器文化」	『物質文化』59
長沼　孝	1998「北海道の土偶」	『土偶研究の地平　3』
堀口萬吉他	1986『新編埼玉県史』別編３　自然	
村越　潔	1974『円筒土器文化』	雄山閣考古学選書10

写 真 図 版



中尾緑島遺跡全景　北から

調査区北半部分　南から

調査区南半部分　南から

第１号住居跡　南東から

第２号住居跡　南から

第２号住居跡遺物出土状況　南から

第２号住居跡　三角形石製品出土状況

第３号住居跡　南から

第３号住居跡遺物出土状況　南から

第４号住居跡　北から

第１号土壙　東から

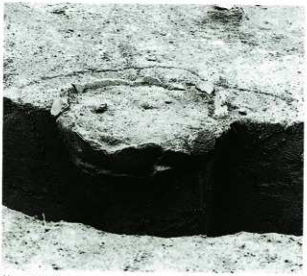
第２・４号土壙　南から

第３・７・８号土壙　南から

第5号土壙　南から

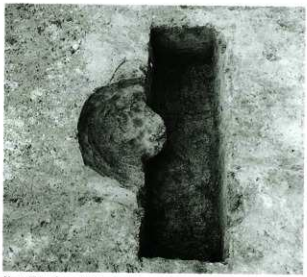
第9号土壙　南西から

第1号埋甕検出状況　北から



第1号埋甕　側面　東から

第1号埋甕　土器出土状況　南から



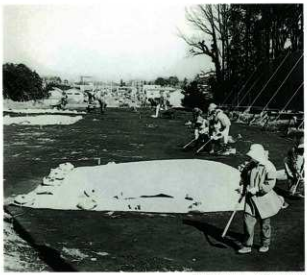
第1号埋甕　完掘　南から

第１号溝　東から

第２号溝　東から

第３号溝　東から

溝群　北から



調査風景　遺構検出

調査風景　第２号住居跡

旧石器時代の遺物

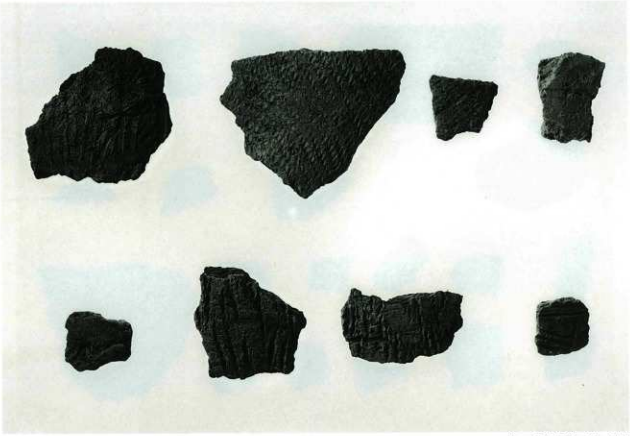
第 2 号住居跡出土土器

第 2 号住居跡出土土器

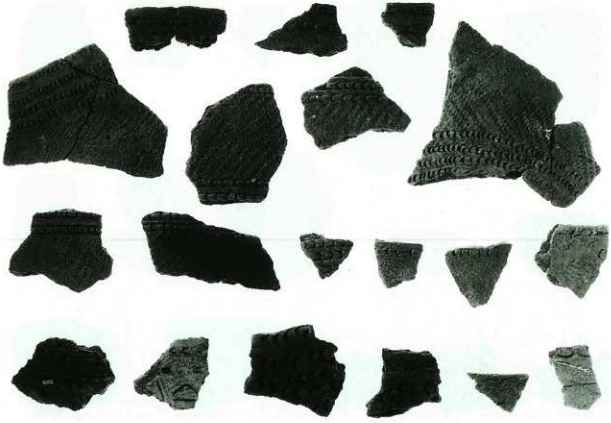
第 2 号住居跡出土土器

第 2 号住居跡出土石製品

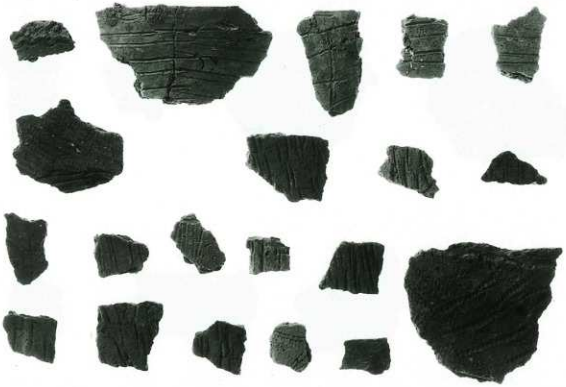
第 1 号埋甕出土土器(1)



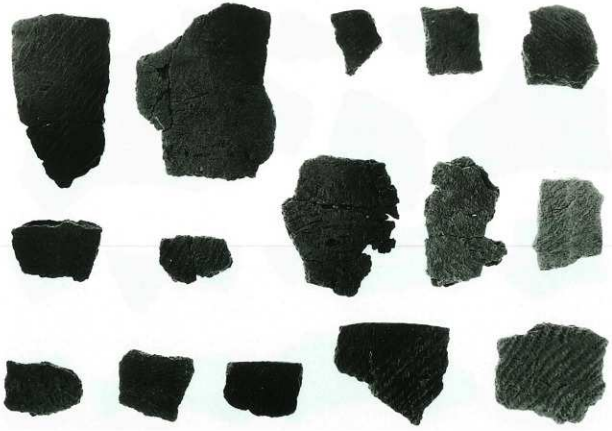
第１号住居跡出土土器



第２号住居跡出土土器(1)

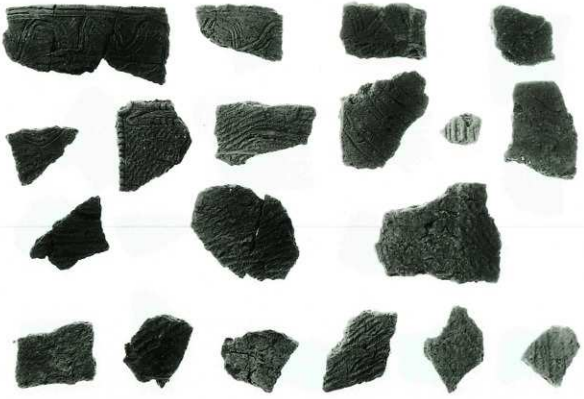


第 2 号住居跡出土土器(2)

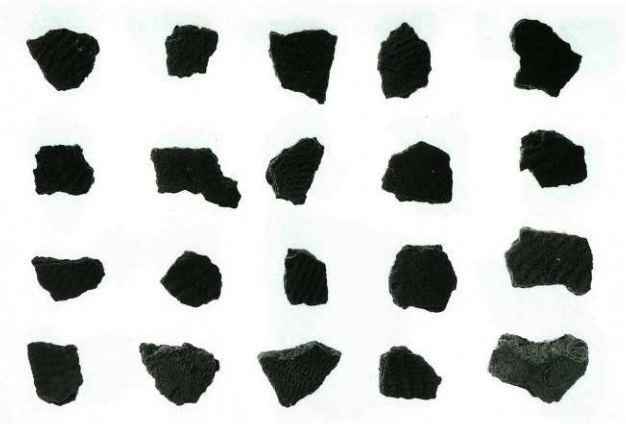


第 2 号住居跡出土土器(3)

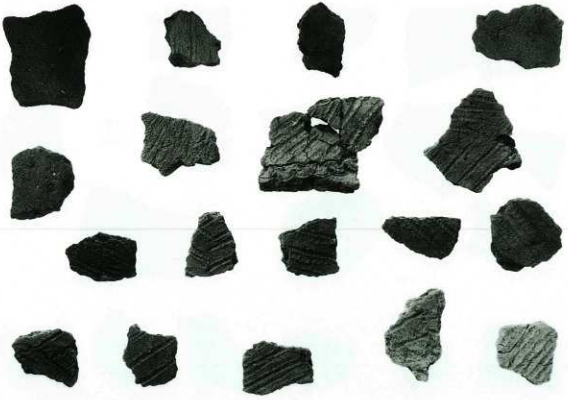
第 2 号住居跡出土土器(4)



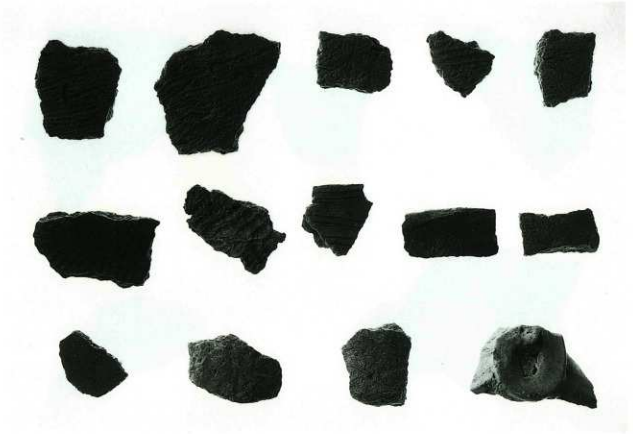
第 3 号住居跡出土土器(1)



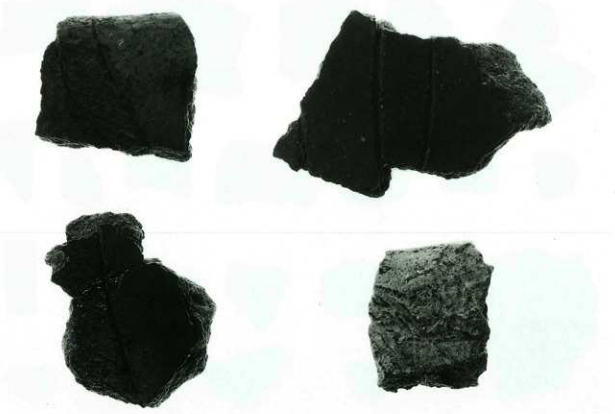
第３号住居跡出土土器(2)



第４号住居跡出土土器(1)

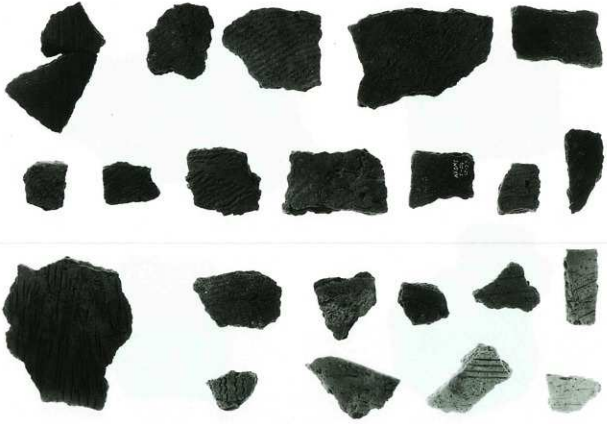


第４号住居跡出土土器(2)

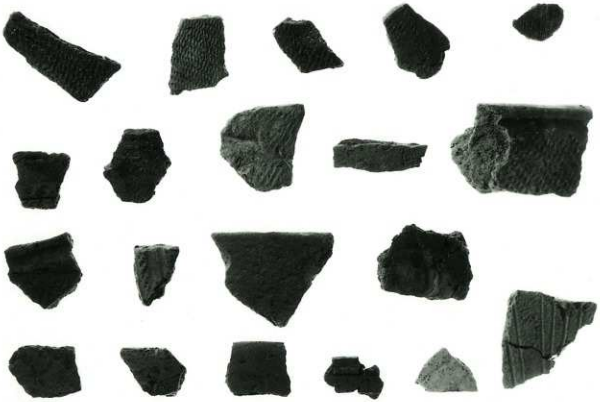


第１号埋甕出土土器(2)

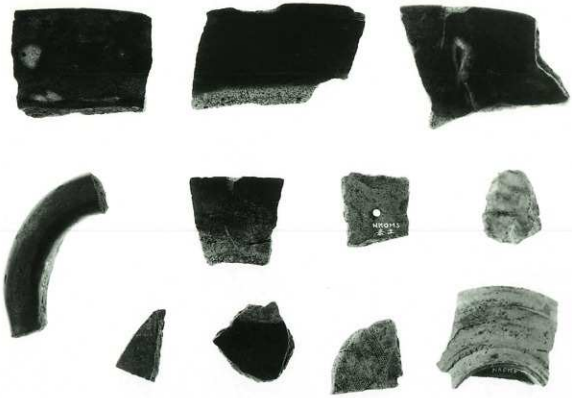
土壙出土土器



グリッド出土土器(1)



グリッド出土土器(2)



中・近世の遺物

報告書抄録

ふりがな	なかおみどりしまいせき
書名	中尾緑島遺跡
副書名	都市計画道路大宮東京線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第265集
著者氏名	渡辺清志
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県大里郡大里村船木台四丁目4番地1　TEL 0493-39-3955
発行年月日	西暦2000（平成12）年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
中尾緑島遺跡（なかおみどりしま）	埼玉県浦和市中尾（うらわし なかお）2541他	01	179	35°51′55″	139°41′32″	平成7年12月1日～平成8年3月31日	2,500㎡	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中尾緑島	集落跡	縄文時代早期・前期	竪穴住居跡　4軒 土壙　7基 土器埋設遺構　1基	旧石器時代石器 縄文土器 石器 石製品	三角形石製品

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第265集

浦和市

中尾緑島遺跡

都市計画道路大宮東京線建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成12年8月25日　印刷
平成12年8月31日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　大里郡大里村船木台四丁目4番地1
電話　0493(39)3955

印刷／㈱太陽美術